胡蝶は眠る花の宿 タンネの氷柱消ゆる頃

青き希望の雪峯こえて 牧場に結ぶ夢遙か
まきょい
いまきょう
いまきょう 四海に羽振る若鵬のしかいはぶったかどり

石狩を立つ意気をみんいかが

一のおか の懸崖ゆくだけ入る に烏頭咲けば

> 蓬髪風に靡け なび 懐情は尽きず果てもなく うつ

旭光東に色めけば 吹雪怒りて咆ゆる夜も 十勝の峰に捲き起こる

大雪原の霊光やだいせつげん れいこう 無絃琴の音ぞ高

熊追ふ愛奴の雄叫び

万ぱん 里り

一の波濤翔らんと

白鷗はしばし憩ふなり

幌馬車の影消え去りぬ ぱっぱしゃ かげき さ 友がゆくての野を遠くとも もゆる紅葉をかざしたる真紅の夕陽山の端に

千々の瞑想は来し方の野る垂氷に月くだけ

緑ら い 若き力を求むなり 苔むす楡鐘の哀調きけ 六十の秋はしるくして に浮ぶ白亜城

白石祐義君 君 作曲 作歌